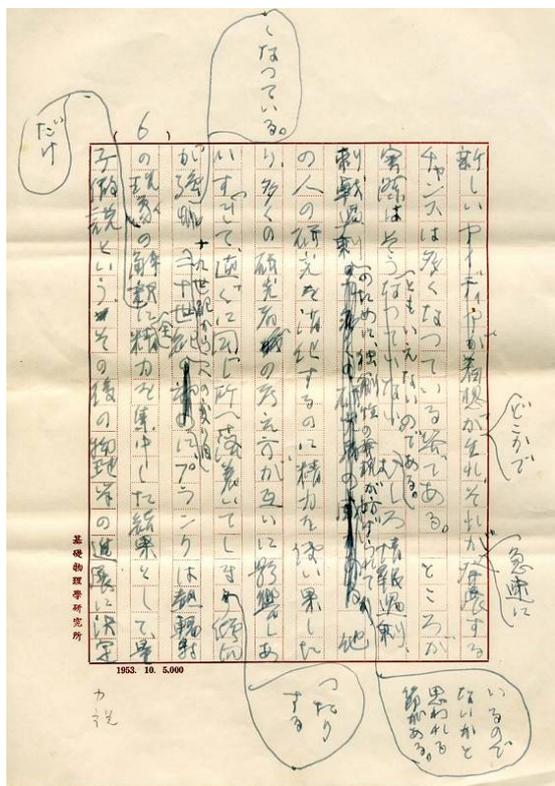


湯川秀樹の直筆原稿



湯川秀樹の直筆原稿

元毎日新聞京都支局長・故山本礼氏が所蔵していたもので、遺族の角本誠氏から寄贈された。

筆跡からは湯川の間人像が想像させられます。シンポジウム開催という市民の参画活動の副産物で、科学館資料としては逸品の一つです。この他にも湯川の著作物など多くの関連資料の寄贈がありました。

現在、湯川会は出版に向けて活動を続けています。中間子論の記念碑である大阪市立科学館での市民活動は、それ自体がとても素晴らしいことです。そして、その活動は資料収集という科学館活動の根幹にも寄与しているのです。

どのようなものが出版されるか、今後の湯川会の活動がとても楽しみです。そして、出版を機に多くの資料が寄贈されることをも期待しています。毎月定例会で様々なことが議論されています。見学大歓迎です。詳しくはホームページ (<http://www.yukawa100.org/>) をご覧ください。

齋藤吉彦 (科学館学芸員)

昨年3月に「市民による湯川秀樹生誕100年シンポジウム」が開催されました。このシンポジウムを主催したのは「湯川秀樹を研究する市民の会」(以降、湯川会)です。湯川は阪大在籍中に中間子論を発表し、その成果で日本最初のノーベル賞を受賞しました。その阪大の跡地にある大阪市立科学館で記念事業をしようと、湯川会がりろんサークルのメンバーを中心に結成されました。その後、友の会会員や友の会以外の方々も参加され、シンポジウムが大成功のもとに終わることが出来ました。

さて、左は湯川の直筆原稿「独創について」の一部です。シンポジウムに向けた湯川会の活動が新聞などで広く報道されたときに、一市民から科学館に寄贈されたものです。生々しい推敲の跡が湯川の創作活動を思い浮かばせてくれます。